

4、5丁目)と第二耕地整理(現在の帝塚山東、万代、大領の各町丁)がスタートした(図2)。この頃、大阪馬車鉄道・(旧)阪堺電気軌道を契機として交通機関が発達し、住吉も天王寺と結ばれ、郊外住宅地の開発、分譲が進む要因となった。

「東成土地建物株式会社」の経営陣は「船場の大家であった糸屋や染料屋の経営者」であるという記述もあり、彼らが帝塚山・北畠地域を郊外住宅地として開発しようとしたようだ。当時は第一次大戦後の物価騰貴と都市人口が急増する状況の中、それまで職住一体だった船場の商家では、(会社組織となった)店舗と家を分離し、住まいを郊外に移転し始めた頃であった。

蔵の分布について

折込みの住吉蔵マップは、住吉蔵部が住吉区全域を通りから目視調査し、蔵のある所をベースマップにプロットしたものである(通りから確認できていない蔵もあるかもしれないので来年度以降の調査で補完していく)。

ところで、同じく明治末頃、小林一三による箕面有馬電気軌道も豊中市岡町や池田市で郊外住宅地の開発を行っているが、蔵が多く残っているとは聞かない(農家型の住宅の蔵は多少見られる)。また芦屋のような高級住宅地にも蔵が多く残っているとは聞かない。では住吉にはなぜ蔵が多く残っているのだろうか。そして多く残っているエリアはどこか。

まずは折込みの住吉蔵マップを見ていただきたい。住吉区に蔵が多く残るとは言え、平均してどのエリアにもあるわけではない、偏在していることがわかる。全体を概観すると圧倒的に多く残っているのは、現在の帝

塚山・住吉付近である。

耕地整理と蔵の分布

つぎに図2を参照してほしい。これは住吉蔵マップ(折込みのマップ)に耕地整理と(住吉区から聞いた)旧村落のエリアを重ね合わせたものである。

はじめに耕地整理と蔵の分布を見よう。

船場から住まいを住吉に移した住宅には蔵が多く建てられたということだが、帝塚山付近の耕地整理区域がそのエリアだとすると、そこに多くの蔵があるはずである。数えてみると、Aの住吉第一耕地整理区域内には13棟、Bの住吉神一耕地整理区域内には4棟、Cの住吉第二耕地整理区域内には10棟の蔵が残っている。しかし区域Aはまだしも、区域Cはその広い面積にしては少なすぎる数だ。近年、建物更新が進んだのではないかと考えられる。そしてそれら耕地整理区域の西側により多くの蔵が点在する。また旧住吉村から遠く離れた区域D・Eに蔵は見られない。

旧村落と蔵の分布

同じく図2において、旧村落と蔵の分布に注目してほしい。これを見ると蔵の多いエリアと旧村落のエリアが一部を除き、ほぼ重なる。

これは何を意味するのか。

住吉村としての区域は広がったが集落の部分は限定されていたと考えられ、多くは田畑や原野が占めていた。耕地整理はその部分を整理したはずである。そこが開発され、分譲された。ちょうど約100年前である(実測調査を行った2つの蔵も約100年前に建てられたと聞いた)。この頃船場から住吉に住まいを移し同時に蔵を建てたとすれば時

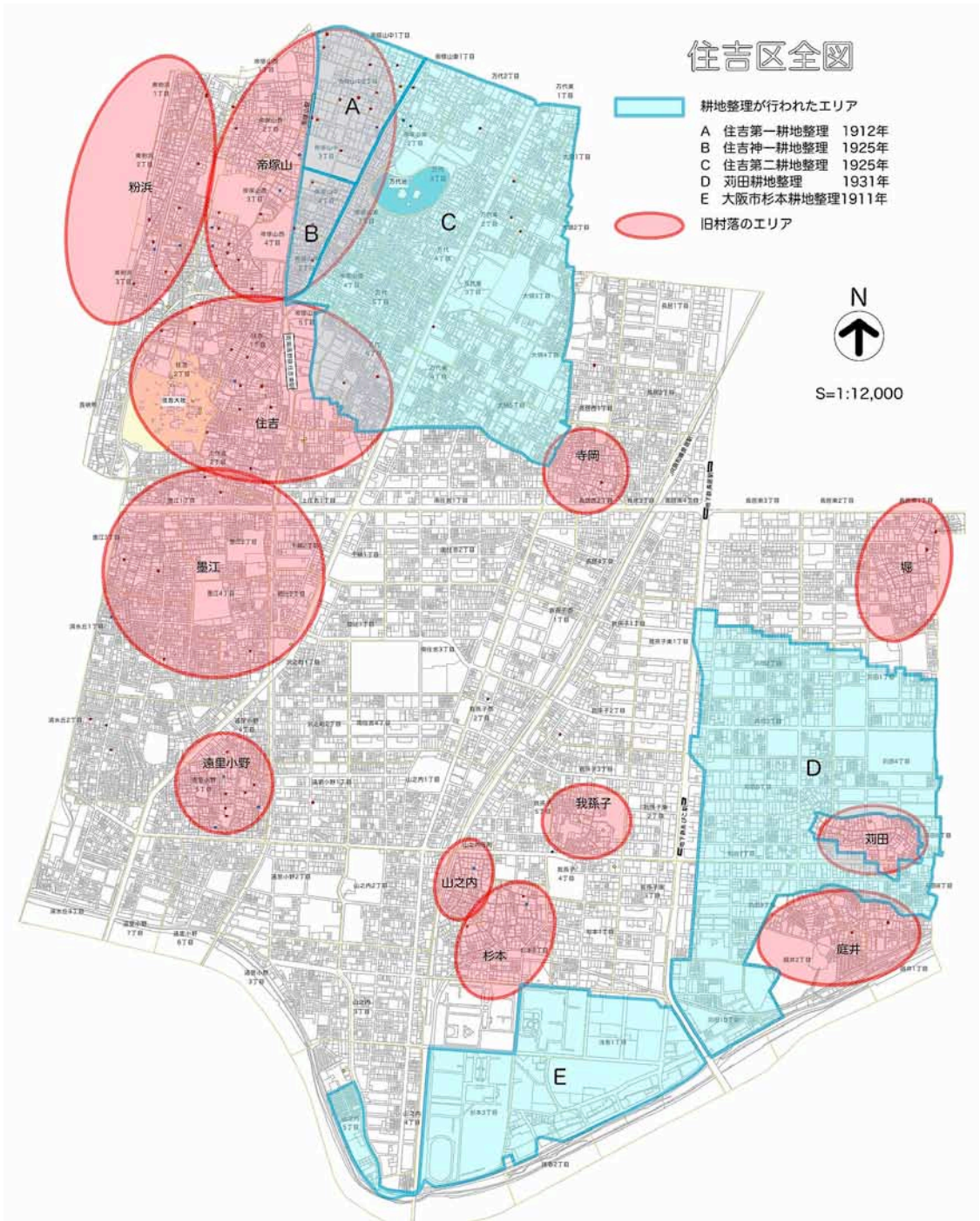


図2 耕地整理と旧村落と蔵の分布